

『ジェンダー研究』21号の刊行によせて

学術誌『ジェンダー研究』は本年2018年刊行の今号第21号をもって、通巻38号となる。今年、編集方針と誌面を大きく改定し、国内外のジェンダー研究論文や書評を掲載する国際的な学術誌として新たなスタートを切った。

お茶の水女子大学ジェンダー研究センターの紀要として創刊された本誌が、日本の代表的なジェンダー研究の学術誌へと成長を遂げたのは、前編集長足立眞理子名誉教授をはじめ、ジェンダー研究センターの前任者らのご尽力によるものである。足立前編集長に背中を押され、今後一層水準の高い学術誌を目指すという重大な役目を担うことになり、新編集長として身の引き締まる思いである。

『ジェンダー研究』の刷新は、国内の研究成果を国際的に発信するとともに、海外の優れた研究を国内に紹介し、ジェンダー研究の重要 이슈 に学術的に取り組む言説空間を創成することを目的としている。編集委員会ならびに編集事務局では、その目的にかなう新雑誌を目指し、この1年近く、編集方針から表紙デザインまで何度も議論を重ね、一步一步準備を進めてきた。グローバルな研究発信や投稿募集を念頭におき、新『ジェンダー研究』は、基本的な使用言語を日本語と英語にして、国内外から広く研究論文を募集、掲載することにした。

専門的なジェンダー研究の学術誌が存在する意義は、女性の歴史を顧みれば明白である。近代においてさえ女性は公的な記録から排除され、また自ら発信できる言論の場を持てなかった。正統な知識と言論の生成は男性の特権とされ、女性は知識生産の主体と見なされず、自らの経験を語る言葉すら長らく獲得しえなかった。女性の言葉は信頼性が疑われ、権威も与えられず、マンスプレイン (mansplain: 男性が、女性の能力や学識を見くびり、女性にとっては既知のことを、教え諭すこと) を受けてきた。男性のみが発言する学術会議や学術雑誌が問題視されることもなかった。

それに抗して、女性たちが自らの経験や自分の目に映る世界を表現できる「女性」の言葉を獲得し、発話の主体となることで、社会を変えていくことが、フェミニスト研究者のミッションであった。本誌『ジェンダー研究』は、そのミッションを引き継ぐものである。これからも「女性」たちの批判的視座を培い、自らの言葉で理論化をすすめて、そこから創成される対案的な知を公的な場に発信する役割を担い続けて行きたい。

本誌は多くの人たちの共同作業から生まれた。本誌のリニューアルに当たっては、石井クノツ昌子ジェンダー研究所長の力添えにより、お茶の水女子大学のグローバル女性リーダー育成研究機構から惜しめないサポートをいただいた。また、ジェンダー研究所のスタッフ、とりわけ、佐野潤子、仙波由加里、和田容子氏からなる編集事務局は、編集作業において、共に奮闘してくれた。彼女らと一緒になかったら本誌が光をみることはなかっただろう。心から深く感謝したい。